

5. トピックス

5.1. 国際

5.1.1. UNSCEAR

国連科学委員会(UNSCEAR)は、放射線の線源・利用・生物影響などに関する最新の知見を収集し、各国のサーベイデータを合わせた報告書を数年に一回国連総会に報告している。その最新のものは2008年に出されたものであり、Annex Aには医療放射線の詳細なデータが掲載されている。その中には、日本からのデータも数多く含まれている。

医療放射線関係では、放射線診断・放射線治療・核医学など、核種放射線診療における実施頻度・被ばく線量の値が国毎に示されているが、必ずしもすべてのデータが揃っている訳ではない。レポートによれば、世界の医療放射線利用は年々増加傾向にある。例えば、**放射線診断の一人当たり年実効線量は、1988年の0.35mSvから、2008年には0.62mSvとほぼ倍近く増加した。**

5.1.2. IAEA

国際原子力機関(International Atomic Energy Agency: IAEA)は、原子力だけでなく、医療を含めた放射線分野における放射線利用の安全基準策定などをはじめ、教育訓練用のコンテンツ作成など、種々の活動を行っている。

医療放射線に関わる問題として、一人の患者が複数の放射線診療を受けているが、個人毎に医療被ばくの履歴を把握するシステムがないことが指摘されてきた。そこで、IAEAは患者の医療被ばくの履歴追跡システム構築を目指し、**Smart Card/SmartRadTrack project**を立ち上げた。

<https://rpop.iaea.org/RPOP/RPOP/Content/News/smart-card-project.htm>

2009年から現在まで、計3回の会合が開催されている。追跡は、放射線診断(X線診断・IVR・核医学)の種類と線量をカードに記録する、あるいはカードを記録に対するアクセスキーとするイメージである。欧州では、複数の医療施設で履歴追跡可能システムを構築している国もある。

5.1.3. WHO

世界保健機関(World Health Organization: WHO)は、2008年から**Global Initiative on Radiation Safety in Health Care Settings**を開始した。

http://www.who.int/ionizing_radiation/about/med_exposure/en/index1.html

これは、医療における放射線の安全な利用を、保健当局・国際機関・専門家・学術団体などのステークホルダーも交えて推進しようとする活動である。

リスクアセスメント・リスクマネジメント・リスクコミュニケーションの3つの柱で構成されている。

これまでに、大小合わせて4回の会合が開催された。

5.2. 諸外国

米国では、**Image Gently campaign** が進められている。

これは、小児放射線科医らを中心に始められた、小児患者に適切な放射線診療を提供するための活動で、賛同する団体数も多い。

ウェブには、親向けのパンフレットや診療記録用フォーマットなども掲載されている。

<http://www.pedrad.org/associations/5364/ig/>

5.3. 国内

医療被ばくの諸問題は非常に数多いが、その対応には既存の組織あるいは個人が別個に活動していることでは対処しきれないことが関係者の間で議論されてきた。

国際的にも、先述のWHO Global Initiative、IAEA Smart Card/SmartRadTrack Projectなどが動き始め、オールジャパンとしての対応を考えなければならぬ状況になってきたことを機に、関係諸団体が協力して諸問題に取り組める組織立ち上げの話が出てきた。

2010年3月「**医療被ばく研究情報ネットワーク**」(**Japan Network for Research and Information on Medical Exposures: J-RIME**)が設立され、活動が開始された。ネットワークの長は放医研の米倉理事長で、事務局は放医研内に置かれている。国内外の医療被ばく防護に対するハブ的機能により、今後大きな役割を果たすことが期待されている。